



@Sorani\_Ao

〈二年〉

ナイン                    /    中山  広大  
美術部のかわった先輩   /    長野  賢人

〈三年〉

イヤホンと青            /    西  真希

わたしは写真家をやっている。

街の風景。人々の生活。様々な光の模様を、写真として保存している。

そんな私は、時折、ただ空を撮ることがある。

何にもない、ただ、白い雲と青い空しかないただの空を、だ。

いつもは、ただその風景を撮るが、今回は飛ぶ鳥たちを捉える。

彼らの翼に不自由などない。ただ、移り変わる季節に乗って、海を渡るのだ。

そうして、シャッターを切ろうとしたその時である。

爆音と、熱と、雲のヴェールをま

とって飛ぶ赤い鉄の巨鳥。そして、

その翼にある崩れた『IX』のエンブレム。

ある季節の変わり目に、彼らが海を越えてやって来た時、我々の空は失われた。

そう、つまり、戦争があったのだ。

フレームを覗いているときは、自分分は風景の外から俯瞰しているのだと思いついていた。だが、実際は相手の国の、一国民でしかないとかかった。

このカメラを持つと決めるとき、私は特に客観してシャッターを切

ると決めた。

私の住む街が、とくべつ何かの被害を受けているわけでもない。だが、大衆の彼の国に対する恨み言や敵対意識が強い流れの波になって、つい、足をすくわれそうになる。

波にのまれないようにするため  
に思いついたのは、彼の国を見に行  
って、その光景を写真に収めること  
だった。

戦場カメラマンではないので、わざわざ兵士の乗る装甲車に同乗しようなどとは思わない。私がしたいのは、あくまで向こうの人々の生活

風景を見るだけだ。

もつとひどい戦いになる。私の家もきつと破壊されるのだ。そう思っていたが、戦時下は、私が思っているより柔軟だった。

海に面したこの街は、港として重要な役割を担う。だからこそか、すでに占領下であるこの街では、特に虐殺など起きていない。

海の向こうから来た兵士たちに愛想よくする街の人々は、だが、裏で兵士から情報をくすねたりして、自国の軍にそれを流すなど、ささやかなレジスタンス活動を行っていたりもする。

さつきも言ったが、私は常に客観だ。そのようなスパイ活動に参加していないつもりだ。ただ、その時何があったか、見たままの真実を写真にしているだけの、いわば撮影マシンに過ぎない。その時までには、ずっとそうだろうと思っていた。

酒場には、よく向こうの兵士たちがやってくる。そこはレジスタンスにとって恰好の餌場だ。

その餌場には、時折『鷹』がやってくる。店の看板に巣を作ったという意味ではない。

赤い戦闘機に乗ってきた彼らは、向こうの国のエース部隊の一つ。

最初に、渡り鳥を撮ろうとしたときに映りこんだ赤い巨鳥は彼らの機体。

『ナイン』とだけ呼ばれる隊長の彼と、五人の部下。

いま撃墜数のトップを走る彼とは、一度話をしたいと思っていた。

「エースか……。確かに、そう言われることが多い。皆は喜ぶが、個人の戦績が伸びることは、同時に国が負けていることを意味しているんだ」

彼の部下は、他の兵士たちと酒を  
楽しんでる。ただ、昔から彼の部  
隊にいる褐色の肌の彼女は、ナイン  
の隣でただ静かに佇んでいる。

ナインは部下を少し見やると、酒  
を一口にして、話を続ける。

「前に、この部隊にいた戦士たちは、  
みな墮とされてしまった。俺は繰り  
上げ当選だよ。『9』は最強の証だ。

俺の前と、その前の隊長も背負って  
いた数字だが、まだ俺が背負うべき  
ではないと思ってる」

すると、隣に座る彼女が、改めて  
彼の方に向き直る。

「わかっているよ。あいつらが無事

に生き残ったなら、改めて『IX』を  
背負うつもりだ」

その翌日、彼らは本国の向こうに  
ある、ここは正反対の戦地へ飛ん  
だ。

彼らを追いかけるように、という  
わけではなかったが、私も海を渡っ  
て彼らの国へ向かうことにする。

「姉ちゃん。また写真撮りに行く  
の？」

家を出て、道を歩く私に声をかけ  
たのは、隣の酒場の息子。まだ十二  
歳の彼は小さなレジスタンスだ。私

にとっては従弟のような存在で、特  
に遠い血縁でもない。

「そうよ。今度は向こうの国がどう  
いうところか見てこようと思って」  
「ふーん。そうなの？」

とても聡い子だ。最近の小学生は  
賢いなと思ったが、思い返してみれ  
ば、私の同級生にもそんな奴が居た  
か。

「ごっこ遊びがエスカレートしな  
いようにね」

「やばくなりそうだったら、きっぱ  
りやめるさ」

暗に子供っぽいと言われても、そ  
うではないと言い返さないあたり、

彼は間違いなく大人だろうなと安心して船に乗った。

一日かけて船が到着すると、その風景は色褪せていた。

なんと表現するのが適切かわからないが、特に、人々からは生気を感じなかった。

戦争は銃を持って戦う兵士たちだけの話ではない。国全体を巻き込む一つの現象といつてよいだろう。

彼らの国は大きい。だが、二つの方向からやってくる私たちの国を含む連合軍、そして巨大な軍事力を持つ連邦の攻撃に対処して、そのダ

メージは隠しきれなくなっていた。

彼らの国が、私たちの街を占領したとき、それはまさしく飛ぶ鳥を落とす勢いだった。

曰く「敵」にとんでもない飛行機乗りが現れて、そのたった一人が戦局を大きく変え、たちまち彼らの国は負け始めた。

活気のない灰色の街を、写真に収める。

たった一人が戦局を変えるなど、馬鹿らしい話だ。そう思っていた。

だが、本当らしいと実感したのは、赤い巨鳥たちがこの国の航空基地

に帰ってきた時だった。

「いち、に、さん、し、ご。五機……？」

何度数えても、そこには五機しかない。それに『IX』を翼につけた機体の着陸は疲れ果ててよろめいているように見えた。

私は彼らが行ったというバーへ向かった。

ただの撮影マシーンと改めて認識するつもりでここへ来たかったのに、今では彼らの側に立って物事を見ている気がする。

私はバーの扉を開いた。

ほかの兵士たちと飲むナインの部下。どこかから元氣に見える彼らの笑顔と、そしてやはり一人足りなかった。

「ああ、あんた。こっちに来ていたのか」

私が隊員たちを見まわしていた意図に気づいたのか、ナインは話を始めた。

「あいつは先に行っちゃったよ……。俺のミスだ」

編隊も組まず、たった一機だけの黒い戦闘機。

その黒い鳥は地上部隊を壊滅させるると、万全の状態でやってきた彼

ら六機を相手にして、返り討ちにした。

そして、ナインの部下が、彼をミスイルから庇って落とされたのだとも。

悔いる表情で話す彼は、その黒い鳥の話をするにつれ、強敵を目にした戦士の顔になっていた。

「レイヴン。奴はエースだ……！俺が墮とさなければならぬ」

彼女は、ナインを憐れむようにして、その肩に触れる。

私の心は、様々な感情が複雑に絡み合っていた。

次と、その次の出撃で、部隊はとうとうナインと彼女だけになってしまう。

補充の人員も、いまだ割り当てられていない。

「相手を恨んだりはいしない。レイヴン。彼も祖国のために戦っている。もし恨む相手がいるとすれば、それは、俺自身だよ」

だが、その次の出撃から帰ってきたとき。降りてきたのは一機だけだった。

その日。バーに現れた彼は、しばらく何も語らなかった。

「なぜ。どうして俺だけがいつも生き残る。あの瞬間。死ぬのは彼女ではなかったはずだ……」

戦士たちの戦いである。盲目になつて追いかけてきた写真家の町娘などが口を出すべきではない。

そう思っていたが、それでも、俯いて、握りしめた彼の拳にそつと手を重ねる。

「あなたは、取り残されたのではないと思います。皆、あなたに生きていてほしいから、あなたのために戦つた」

酒盛りする兵士たちの喧騒けんそうをよそに、彼との間には重苦しい空気が

流れ続けた。

すると。彼が重ねた手に重ね返す。

「そうだな……。あの『IX』を背負つたんだ。俺も彼らのために戦う。」

一呼吸置くと、ずつと俯いていた彼はしっかりとこちらの目を見た。

「『最後』に。君の名前を聞かせてくれないか」

「シンシア。シンシア・オルソン」

彼は、いい名だ。と言って、次に自身の名前を告げた。

「俺は――」

そのあとのことは『戦後』の錯綜さくそうした情報のせいで、何も知らない。

彼らの国の正式な発表にて、私は彼が空で散ったことを知る。

街は『解放』されたが、彼らと一緒にいて、敵とか味方とか、そんな感覚はいつの間になくなっていった。

私は、自分の気持ちがわからないような子供ではない。

しかし確かに、戦士の彼と私との間は分厚いガラスに仕切られていたのだ。

そのことが分かったから、自分の気持ちは心の中でとどめておくことにした。

彼らの写真は、部屋の机に立てか

けてある。せめて戦士ではなく、人間としての彼らを忘れないように。

終戦後、私は自由になった空を写真に撮ろうとした。

自由の象徴たる渡り鳥をフレームに収めて。

そうして、シャッターを切ろうとしたその時である。

爆音と、熱と、雲のヴェールをまとって飛ぶ黒い鉄の巨鳥。その尾翼にはカラスのエンブレムが描かれている。

彼が言っていた、レイヴンというパイロット。そうだと直感で分かり、

私は何とか彼にインタビューを取り付けた。

「ええ。その時は、ずいぶんと押し込まれていましたから。僕は必死に飛んでいました」

どのような人物だろうか。だが、実際に目の前にいたその人は、優し目をしたカラスだった。

彼は、私がインタビュを終えようとすると、最後に引き留めるように言った。

「彼らの、あの戦士たちの墓はありますか？」

その日から、私はレイヴンのいる基地に入り浸るようになった。

民間人でありながら、基地の人たちとは顔なじみ同然となっていた。その日の帰り。

基地のフェンス越しに、彼の機体が滑走路へタキシングしていた。

その翼は赤く塗られており、尾翼には『IX』のマークが見える。

黒い鳥が飛び立つ姿を見送って、改めて車を走らせる。

サイドミラーに映る戦闘機の姿。一瞬だったか。彼の機体の周りに、赤い機体と一緒に飛んでいるように見えて、思わずブレーキを

踏み込んで振り返る。

当たり前だが、そこには黒い戦闘機が一機だけ。

しかし確かに、彼らの魂はあの翼と一緒に飛んでいるのだとわかって、何でもない飛行機の後姿を写真に収めた。

私、市ノ瀬は高校が休みというこ  
とで、目当ての物のために買い物に  
出かけ、歩いて帰宅しようとしてい  
た。

私の家は、河川敷を通った先の住  
宅街にある。

この河川敷の特徴として、芝生は  
良く手入れされているため、足先ま  
で伸びていないことが多い。

だから、寝転がっている人なんか  
がいれば、すぐく目立つ。

河川敷の整地された道を通った  
先の家を目指す。

冷たさの感じる風を受けながら、  
歩いていると、河川敷の芝生に寝転

がっている男を見つける。

あんな人もいるんだと思って、素  
通りできればよかったのだけれど、  
寝ているのは私のよく知っている  
人だった。

私の通う高校二年生の男子で、美  
術部の先輩の七瀬さんだった。

愛用のスケッチブックを近くに  
おき、芝生に寝転がっている七瀬さ  
んは、長方形に切りとられ、穴の開  
いた片手サイズの厚紙を持ってい  
た。

聞いた話によると、小学生のころ  
から描いた絵で何かしらの賞を取  
り続けているらしく、実際に見たこ

とがあるけど、一言でいうなら、生  
きていると感じさせてくれる絵が  
多かった。

何となくで入った美術部だけど、  
七瀬さんの絵を見てからは、憧れの  
対象として気になっているのは、私  
自身も気づいている。

七瀬さんを知っていく中で、正直  
言って先輩のことを理解できる気  
にはなれないこともわかってしま  
った。

男の裸体の彫像を見たからって、  
「乳首黒くしたら面白いかな」とか  
言い出したり、雲のカタチが古臭い  
UFOそっくりという理由で、「U

F Oだ！ 絶対中にU F O隠れて  
るって！」と大声で言ってくるし、  
バランスよくリラククスできると  
いいだして、机の上でヨガをして、  
案の定、先生の怒られていたり、と  
にかく奇行が目立つ人なのは良く  
分かった。

私はそんな七瀬さんを見続けて  
いた影響なのか、今度は何をしてい  
るのか無意識に気になってしまっ  
ようになつていた。

「何してるんですか？」

近づいて尋ねた私に、七瀬さんは

「ああ、市ノ瀬か」と反応する。

「流れる雲がいい感じの青空だっ

たから見てた」

「その手に持ってるのは？」

私の質問に、七瀬さんは厚紙を空  
に向ける。

「空をこの穴から見てた」

「？ どうしてそんなことを」

「写真みたいでいいかなって」

私の疑問にさも当然のように答  
える七瀬さん。

「それなら、写真を撮ればいいじゃ

ないですか」

「写真から描いたら、それは模写だ  
よ」

こういう返しをすぐに言ってく  
るのが、七瀬さんだ。

「何ですかその理屈」

「好きなように描くのも、俺たちに  
大事な強さだからな」

それで実際に結果を出している  
から、この人の言う事は正しいと思  
う。

「そう言うもんですか」

まだ、芸術というものがよくわか  
らないから、あいまいに答えてしま  
う。

「市ノ瀬もやってみろよ」

七瀬さんはそう言って、私に厚紙  
を渡してきた。

厚紙を手を取った私は、荷物を置  
いて七瀬さんの横に寝転がる。

カメラのフレームを合わせるように、厚紙から青空を覗き込む。

言葉一つだすことはなく、ただただ覗き込む。

「うーん。やっぱり私にはわかり」

「ません」と七瀬さんに視線を向けて話しかけようとしたが、七瀬さんはいびきを「ぐーぐー」言いながら眠っていた。

気持ちよさそうに眠る七瀬さんに呆れてしまったが、そんな寝顔を厚紙から覗いてみた。

「こういう事なのかなー」

美術部で習ったことの一つ。

気になるものがあるなら、素早く

スケッチすること。

私はスケッチブックを開いてペンを持つ。

七瀬さんが動き出す前に、手早く

スケッチする。

スケッチをし終えた私は再び、厚紙から七瀬さんの寝顔を覗き込む。

「早く起きないかなー」

目の前には、終わりのない青が広がっていた。

ありきたりな表現だと、イヤホンを揺らしながら笑う。両耳に響く聴きなれたサウンドは、外の世界のノイズを誤魔化してくれていた。僕が感じているのは、静かな青と音楽だけだ。

乱反射する水面、青いキャンバスに浮かぶ白い雲。穏やかに満ち引きする海は、潮騒しおさいを鳴らしているのだろうと想像できた。音を遮断した僕には、あくまでも想像でしかないのだけれど。

海辺を一望できる堤防に腰かけ

ながら、そんな情景に浸っていた。

目的はない。ただ、灰色の薄暗い部屋は息苦しくて、けれど人々が蠢うごめく街は心が苦しかった。外出する時には、イヤホンと音楽に依存している。

そこでようやく深呼吸をして、鞆から葉書サイズの木枠を取り出す。白く塗られたそれは、写真立ての枠のようにも見えるし、線のない簡素なデッサンスケールにも見える。

「君はほんの少しだけ欲張りなんだ」と、かつての友人に貰ったものだ。その言葉は、分かりようがない。分からないまま、別れてしまったか

ら。

木枠きわくを掲げて、青空を縁取ってみる。澄み切った空には厚い雲が浮かんでいて、風でゆっくりと動くその光景は、生きた写真のようだった。僕が描きたい情景は、歌いたい感情は、多分こういうものなのだろう。

流れていた音楽が終わって、プレイリストの次の曲が流れる。唯一、僕が創った曲だった。この曲を創り終えたきり、もう長いこと作曲できていない。打ち込むサウンドは雑音に聞こえるし、紡ぎ出す詩は乱雑としていて汚い。離別が生み出したスランプは、海よりも深く暗く、そし

て苦しかった。

何も生み出せない。何も表現できない。遮ったはずの騒音が僕を刺してくる。綺麗なはずの鮮やか風景が僕を焼き殺してくる。自分は酷く矮小<sup>わいしょう</sup>で価値のない人間なのだと、終わりのない雄大な青空が告げてくる。

ありもしない何かに縋るように、縁取られた青に手を伸ばした。けれど、空は遙か遠くから僕を見下ろして、広げた手のひらは虚しさを掴んだ。何もかも、空っぽだ。

僕の曲が終わって、曲間の僅かな無音がやってくる。抑圧された騒音

の隙間から、今はもう聞くことのできない声がした気がした。「君はほんの少しだけ欲張りなんだ」と。

空っぽの手のひらに視線を向ける。空なんて掴めるわけがない。ただの木枠であの青を切り取れるわけがない。縁どられた小さな世界を、ただ見上げることしかできない。……でも多分、それでいいんだ。

僕が矮小で無価値なんじゃない。これが、人間の、僕の等身大なんだ。好きなアーティストの曲が流れます。かつての友人が、彼女が好き  
な歌でもあった。

雲が流れて、波打ち際が満ち引き

を繰り返して、青が変わらず広がりを続ける。風が潮の香りを運んで、イヤホンを揺らした。

イヤホンを外す。大きくなった潮騒が鼓膜を揺らす。見ている風景は変わらないのに、妙に色彩が綺麗に思えた。残酷なまでに広がり続ける青い世界は、等身大の小さな僕に反射して、ほんの少しだけ愛おしく思えた。